

田端日記

芥川龍之介

青空文庫

〔八月〕二十七日

朝床とこの中でぐずついていたら、六時になった。何か夢を見たと思つて考え出そうとしたが思いつかない。

起きて顔を洗つて、にぎり飯を食つて、書斎の机に向つたが、

一いつこう向ものを書く気にもならない。そこで読みかけの本をよんだ。

何だかへんな議論が綿めんめん々と書いてある。面倒臭くなつたから、

それもやめにして腹んばいになつて、小説を読んだ。土左衛門どざえもんに

なりかかった男の心もちを、多少空想的に誇張して、面白く書いてある。こいつは話せると思つたら、こないだから頭に持つてゐる小説が、急に早く書きたくなつた。

バルザックか、誰かが小説の構想をする事を「魔法の巻煙草を吸う」と形容した事がある。僕はそれから魔法の巻煙草とほんものの巻煙草とを、ちゃんぽんに吸った。そうしたらじきに午ひるになった。

午ひるめし飯を食ったら、更に気が重くなった。こう云う時に誰か来ればいいと思うが、生あいにく憎誰も来ない。そうかと云ってこつちから出向くのも厄やっかい介である。そこで仕方がないから、籐とうの枕をして、また小説を読んだ。そうして読みながら、いつか午睡ごすいをしまった。

眼がさめると、階下したに大野さんおおのが来ている。起きて顔を洗って、大野さんの所へ行つて、骨相学こつそうがくの話を少しした。骨相学の起源

は動物学の起源と関係があると云うような事を聞いている中^{うち}にア
 リストテレスがどうかと云うむずかしい話になったから、話の
 方^{ごめん}は御免を蒙^{こうむ}って、一つ僕の顔を見て貰^{はなはだ}う事にした。すると僕は、
 直覚力も推理力も甚^{はなはだ}円満に発達していると云うのだから大したも
 のである。もつともこれは、あとで「動物性も大分^{だいぶん}あります。」
 とか何か云われたので、結局帳消しになってしまったらしい。
 大野さんが帰ったあとで湯にはいって、飯を食って、それから
 十時頃まで、調べ物をした。

二十八日

涼しいから、こう云う日に出なければ出る日はないと思って、

八時頃うちを飛び出した。動坂どうざかから電車に乗って、上野うえので乗換えて、序ついでに琳琅閣りんろうかくへよつて、古本をひやかして、やつと本郷ほんごうの久米くめの所へ行つた。すると南みなみ町まちへ行つて、留守るすだと云うから本郷通りの古本屋を根気こんきよく一軒一軒まわつて歩いて、横文字の本を二三冊買つて、それから南町なんまちへ行くつもりで三丁目から電車に乗つた。

ところが電車に乗っている間あいだに、また気が變つたから今度は須すだちよう田町で乗換えて、丸善まるぜんへ行つた。行つて見ると狛ちんを引張つた妙な異人の女が、ジエコブの小説はないかと云つて、探している。その女の顔をどこかで見たようだと思つたら、四五日前まえに鎌倉で泳いでいるのを見かけたのである。あんな崔嵬さいかいたる段鼻は日本

人にもめつたにない。それでも小僧さんは、レディ・オヴ・ザ・
 バアジならございますとか何とか、丁寧ていねいに挨拶あいさつしていた。大おお方かたこの段鼻も涼しいので東京へ出て来たのだろう。

丸善に一時間ばかりいて、久しぶりで日吉町ひよしちょうへ行ったら、清きよし
 がたった一人ひとりで、留守番をしていた。入学試験はどうしたいと尋き
 いて見たら、「ええ、まあ。」と云いながら、坊主頭ぼうずあたまを撫なでて、
 にやにやしている。それから暇つぶしに清を相手にして、五目ごもくな
 らべをしたら、五番の中四番ともまかされた。

その中うちに皆帰つて来たから、一しよに飯を食つて、世間話をし
 ていると、八重子やえこが買ったての夏帯を、いいでしょうと云つて見
 せに来た。面倒臭いから、「うんいいよ、いいよ。」と云つてい

ると、わざわざしめていた帯をしめかえて、「ああしめにくい。」と顔をしかめている。「しめにくければ、買わなければいいのに。」と云ったら、すぐに「大きなお世話だわ。」とへこまされた。

日暮方に、南町へ電話をかけて置いて、帰ろうとしたら、清が「今夜皆で金春館みんな こんばるかんへ行こうって云うんですがね。一しよに行きませんか。」と云った。八重子も是非ぜひ一しよに行けと云う、これは僕が新橋の芸者なるものを見た事がないから、その序ついでに見せてやろうと云う厚意なのだそうである。僕は八重子に、「お前と一しよに行くと、御夫婦だと思われるからいやだよ。」と云って外へ出た。そうしたら、うしろで「いやあだ。」と云う声と、猪口ちよくの糸底いとぞこほどの唇くちびるを、反そらせて見せるらしいけはいがした。

外濠線へ乗つて、そとぼりせん

たら、その中にはるのぶ春信論が出て来て、ワットオと比較した所が面

白かつたから、いい氣になつて読んでいると、うっかりしている間に、あいだいいだばし飯田橋の乗換えを乗越して新見附しんみつけまで行つてしまった。

車掌にそう云うのも業腹ごうはらだから、下りて、万世橋まんせいばし行へ乗つ

て、七時すぎにやつと満足に南町へ行つた。

南町で晩飯の御馳走ごちそうになつて、久米くめと謎々なぞなぞ論をやつていたら、

たちまち九時になつた。帰りに矢来やらいから江戸川の終点へ出ると、

明き地あにアセチリン瓦斯ガスをともし、催眠術の本を売っている男

がある。そいつが中々たくれいふうはつ厲風れいふう発しているから、面白がつて前

の方へ出て聞いていると、あなたを一つかけて上げましよう云

われたので、そうそう々退却した。こつちの興味に感ちがいをする人間ほど、人迷惑ひとなものはない。

家へ帰ったら、留守るすに來た手紙の中に成瀬なるせのがまじっている。

ニユウヨオク

紐育ニユウヨオクは暑いから、加奈陀カナダへ行くと書いてある。それを読んで

いると久しぶりで成瀬と一しよにあげ足のとりつくらでもしたくなつた。

二十九日

朝から午少ひるし前まで、仕事をしたら、へとへとになつたから、

飯を食つて、水風呂みずぶろへはいつて、漫然まんぜんと四角な字ばかり並んだ

古本をあけて読んでいると、赤木桁平あかぎこうへいが、帷子かたびらの上に縞紬しまろの

羽織が何かひっかけてやって来た。

赤木は昔から李太白りたいはくが鼻^{ひいき}眞^{しん}で、将進酒しょうしんしゅにはウエルトシュ

メルツがあると云うような事を云う男だから、僕の読んでいる本に李太白の名がないと、大に僕を軽蔑おおいした。そこで僕も黙っていると負けた事にされるから暑いのを我慢して、少し議論をした。

どうせ暇つぶしにやる議論だから勝つても負けても、どちらでも差支さしつかえない。その中^{うち}に赤木は、「一体支那人は本へ朱しゅで圈^{けん}点^{てん}

をつけるのが皆うまい。日本人にやとてもああ円くは出来ないから、不思議だ。」と、つまらない事を感じし出した。朱でまるを描かくくらいなら、己おれだって出来ると思つたが、うっかりそんな事を云うと、すぐ「じゃ、やって見ろ。」ぐらいな事になり兼ねな

いから、「成程なるほどそうかね。」とまず敬して遠ざけて置いた。

日の暮れ方に、二人で湯にはいつて、それから、自笑軒じしょうけんへ飯

を食いに行つた。僕はそこで一杯の酒を持ちあつかいながら、赤

木に大倉喜八郎おおくらきはちろうと云う男が作つた小唄の話をしてやつた。何が

どうかしてござりんすと云う、大へんな小唄である。文句もんくも話

した時は覚えていたが、もうすっかり忘れてしまった。赤木は、

これも二三杯の酒で赤くなつて、へええ、聞けば聞くほど愚劣だ

ねと、大おおにその作者を罵倒していた。

かえりに、女中が妙な行燈あんどうに火を入れて、門かどまで送つて来た

ら、その行燈に白い蛾がが何匹もとんで来た。それが甚はなはだ、うつくし

かった。

外へ出たら、このまま家へかえるのが惜しいような気がしたから、二人で電車へ乗つて、^{ふたり}桜木町^{さくらぎちょう}の赤木の家へ行つた。見ると石の門があつて、中に大きな松の木があつて、赤木には少し勿^も体^{たい}ないような家だから、おい家賃はいくらすると訊^きいて見たが、なに存外安いよとか何とか、大に金のありそうな事を云つてすましている。それから、籐椅子^{とういす}に尻を据えて、勝手な気焰^{きえん}をあげていると、奥さんが三^みつ指^{ゆび}で挨拶に出て来られたのには、少からず恐縮した。

すると、向うの家の二階で、何だか楽器を弾^ひき出した。始^{はじめ}はマンドリンかと思つたが、中ごろから、赤木があれは琴^{こと}だと道破^{どうは}した。僕は琴にしたくなかつたから、いや二絃^{にげん}琴だよと異^いを樹^たて

た。しばらくは琴だ二絃琴だと云つて、喧嘩していたが、その中^{うち}に楽器の音^ねがびったりしなくなつた。今になつて考えて見ると、どうもあれはこつちの議論が、向うの人に聞えたのに相違ない。そう思うと、僕はいいが、赤木は向う同志と云う関係上、もつと恐縮して然るべき筈である。

歸りに池^{いけ}の端^{はた}から電車へ乗つたら、左の奥歯が少し痛み出した。舌をやってみると、ぐらぐら動くやつが一本ある。どうも赤木の雄弁に少し崇^{たた}られたらしい。

三十日

朝起きたら、齒の痛みが昨夜^{ゆうべ}よりひどくなつた。鏡に向つて見

ると、左の頬が大分腫だいぶんはれている。いびつになつた顔は、確たしかにあま
り体裁ていさいの好いものじゃない。そこで右の頬をふくらせたら、平
均がとれるだろうと思つて、そつちへ舌をやつて見たが、やつぱ
り顔は左の方へゆがんでいる。少くとも今日きょう一日、こんな顔をし
ているのかと思つたら、甚はなはだ不平な氣がして來た。

ところが飯を食つて、本郷の齒医者へ行つたら、いきなり奥齒
を一本ぬかれたのには驚いた。聞いて見ると、この齒医者 of 先生
は、いまだかつて齒痛しつうの経験がないのだそうである。それでなけ
れば、とてもこんなに顔のゆがんでいる僕をつかまえて辣腕らつわんを
ふるえる筈がない。

かえりに区役所前の古道具屋で、青磁せいじの香炉こうろを一つ見つけて、

いくらだと云つたら、色眼鏡いろめがねをかけた亭主ていしゅが開闢かいびやく以来のふくれつ面つらをして、こちらは十円と云つた。誰がそんなふくれつ面の香炉を買うものか。

それから広小路ひろこうじで、煙草と桃とを買つてうちへ歸つた。齒の痛みは、それでも前とほとんど変りがない。

午飯ひるめしの代りに、アイスクリームと桃とを食つて、二階へ床とこをとらせて、横になった。どうも気分がよくないから、検温器を入れて見ると、熱が八度ばかりある。そこで枕を氷枕こおりまくらに換えて、上からもう一つ氷囊ひやうのうをぶら下げさせた。

すると二時頃になつて、藤岡蔵六ふじおかぞうろくが遊びに来た。到底とうてい起きる気がしないから、横になつたまま、いろいろな話していると、

彼が三分ばかりのびた髭ひげの先をつまみながら、僕は明日か明後日あすあさ御嶽みたけへ論文を書きに行くよと云った。どうせ蔵六の事だから僕がよんだってわかるようなものは書くまいと思つて、またカントとか何とかひやかしたら、そんなものじゃないと答えた。それから、じゃデカルトだろう。君はデカルトが船の中で泥棒に遇あつた話を知っているかと、自分でも訳のわからない事をえらそうにしゃべったら、そんな事は知らないさと、あべこべに輕蔑された。
大方僕が熱に浮かされていとも思つたのだろう。このあとで僕の写真を見せたら、一体君の顔は三角さんかく定規じょうぎを倒さかにしたような顔なのに、こう髪の毛を長くしちや、いよいよエステイツシユな趣を損うよ。と、入らざる忠告を聞かされた。

蔵六が帰った後あとで夕飯ゆうめしに粥かゆを食ったが、更にうまくなかった。
からだじゅう
体中うちがいやにだるくつて、本を読んでも欠伸あくびばかり出る。そ
うち
の中にいつか、うとうと眠つてしまった。

眼がさめて見ると、知らない間あいだに、蚊帳かやが釣つてあつた。そう
して、それにあけて置いた窓から月がさしていた。無論電燈もち
やんと消してある。僕は氷枕の位置を直しながら、蚊帳かやごしに明
るい空を見た。そうしたらこの三年ばかり逢つた事のない人の事
が頭に浮んだ。どこか遠い所へ行つておそらくは幸福にくらして
いる人の事である。

僕は起きて、戸をしめて電燈をつけて、眠くなるまで枕もとの
本を読んだ。

（大正六年）

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集8」ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成元）年8月29日第1刷発行

1998（平成10）年2月17日第3刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」

1971（昭和46）年3月～11月刊行

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2007年7月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

田端日記

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>